「学力向上フロンティアスクール用中間報告書」

都道府県名	三　重　県

Ⅰ．学校の概要（平成１５年度４月現在）

三重県多気郡大台町立三瀬谷小学校										
	１年	２年	３年	４年	５年	６年	障害児学級	計	教員数	
学級数	１	１	１	２	１	２	３	１１	１７	
児童数	３６	３３	４０	４４	３７	４２	５	２３７		

Ⅱ．研究の概要

１．主題主題

主　体　的　に　学　ぶ　授　業　の　創　造

ー調べ・聴き合い・行動するー

２．研究内容と方法

(1)実施学年・教科

・実施学年　全学年

・教科

算数（１年、２年、４年）１５年度から全学年で実施

総合的な学習の時間　（３年、５年、６年）

・選択理由

算数･･･基礎的な力の積み上げが、その後の学習に大きく影響する教科であるため。

総合的な学習の時間･･･本校のとらえた「生きる力」が、各教科における学習を進める上で、大切な資質になるため。

(2)年次ごとの計画

（平成１４年度）

テーマ

・児童の意欲を高める少人数による効果的な授業形態・指導方法の研究（算数）

・「生きる力]の育成につながる学習活動のあり方（総合的な学習の時間）

研究の見通し（仮説）

・少人数で授業を進め、児童の学習状況をより的確につかみ、指導方法の工夫をしていくことによって、児童の意欲を引き出し、「確かな学力」の育成を図ることができる。（算数）

・「課題の設定→課題の解決」という活動の中で、学習活動に臨む姿勢や探求する力を育成することや達成感・満足感を得ることによって、主体的に学ぶ態度が育成される。（総合的な学習の時間）

研究の内容・方法

・観点別学力試験（算数）の実施による学力の把握

・算数アンケートの実施により児童の意識をつかむ

・少人数による授業の研究（算数）

・ティームテーチィングの効果的な活用

・指導方法の工夫（ミニテスト、ミニ感想等を活用して）

・「朝の１０分間読書」の実施による読解力、イメージ力、表現力の育成

・評価の工夫（算数・総合的な学習の時間）

・「調べ・聴き合い・行動する」学習の流れの構築

（平成１５年度）

テーマ

・児童の意欲を高める指導方法の研究、教材開発、評価の工夫（算数）

・「生きる力]の育成につながる学習活動のあり方（各教科領域）

研究の見通し（仮説）

・児童の学力の状況をふまえ、指導方法、教材、評価について工夫し、学習意欲を高めれば、主体的な学習態度の育成につながり、「確かな学力」の定着を図ることができる。

・主体的に学習に取り組む態度を引き出し育てる授業や学習活動を展開することにより、児童が生き生きと学習に取り組み、自ら考え行動できる資質を育てることができる。

研究の内容・方法

・観点別学力試験（国語、算数）の実施による学力の把握

・算数アンケートの実施により児童の意識を把握

・少人数による授業の研究（算数）

・指導方法の工夫（発表ボード、学習プリント、自己評価、等を活用）

・「朝の１０分間読書」の実施による読解力、イメージ力、表現力の育成

・評価の工夫（算数）

・「調べ・聴き合い・行動する」学習の流れの構築

（平成１６年度）

テーマ

・算数科を中心に「確かな学力」の定着を図る研究を進める。

・「調べ・聴き合い・行動する」学習活動を通して主体的に学ぶ姿を追求する。

研究の見通し（仮説）

本校の研究テーマ、『主体的に学ぶ授業の創造－調べ・聴き合い・行動する－』は、子どもたちが課題に対して自分なりの考えを持ち、互いの考えや思いを素直に受け止め合うことでさらに考えを練り上げ、それを実生活に活かしていく「生きる力」の育成を目指している。

「生きる力」につながる主体性を持った児童を育成するためには、一人ひとりの基礎学力を積み上げ定着させることが大切となり、それは「確かな学力」の向上につながっていく。

本校の考える「確かな学力」とは、「関心・意欲・態度、思考力・判断力・表現力、知識・技能」等であり、これを大きく「意欲、考える力、知識」と捉える。その中でも学習していく上で意欲は重要なものである。児童の意欲を高めること、それが学習を主体的なものにしていくのである。

主体的に学び、実践力に向かうまでには、一人ひとりの学習に対する「関心・意欲」をどれほどに膨らませ、持続させられるかが大きく関わってくる。まず、学習活動の中で「できる」・「わかる」という自信や喜びを得られることが意欲に結び付いてくる。

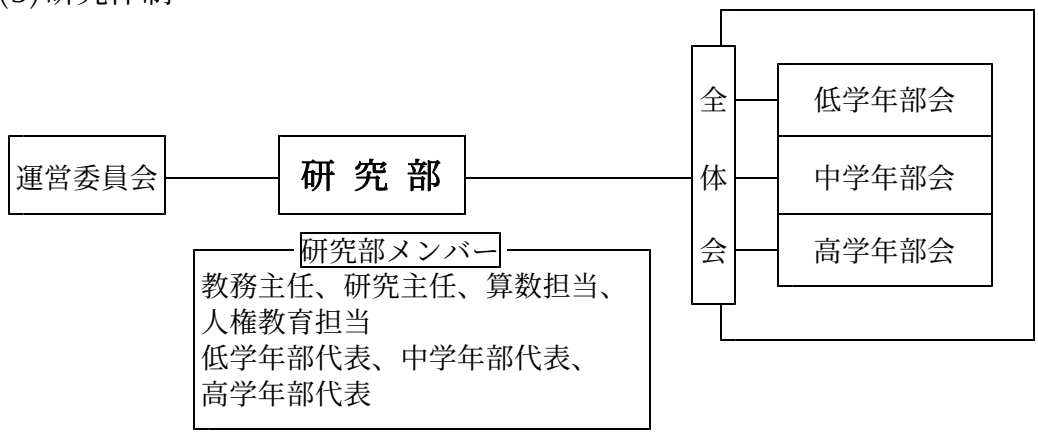
また、学習集団の中で認められ暖かい評価を受けたり、友だちと思考過程を共にすることで課題を解決することが楽しいと思たっりすれば、それも学習意欲につながるものである。

本校では、基礎・基本の積み上げが重要であり、つまずきが発見され易い算数科を中心として「確かな学力」の定着を図る研究を進めることにした。算数科での意欲づけの工夫を中心に、少人数指導・学習形態・指導方法、評価について工夫し、学習意欲を高めれば、主体的な学習態度の育成につながり、「確かな学力」となって子どもたちに身に付いていくと考えた。そして、そこで得られた自信・意欲・コミュニケーション能力は、他の教科・領域においても生き生きと発揮されてくるものと考える。

研究の内容・方法

・観点別学力試験（国語、算数）の実施による学力の把握
・算数アンケートの実施により児童の意識を把握
・児童による選択と機械的分割の少人数による授業の研究（算数）
・指導方法の工夫（発表ボード、学習プリント、自己評価等を活用して）
・「朝の１０分間読書」の実施による読解力、イメージ力、表現力の育成
・評価の工夫
・「調べ・聴き合い・行動する」学習の流れの構築（各教科・領域）

(3)研究体制



Ⅲ．平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

◎学習意欲を高める取り組み…少人数指導について

・本年度の児童による選択でグループ分けをして「茶レンジコース」「実くりコース」の２グループに分け「個人差」や「個性を伸ばす」ための配慮したコース別学習を行った。自分が選んだコースで学習することにより、自分のペースにあった学習を進められるようになってきた。また、児童一人ひとりの個に応じた指導につながるよう、単元の途中の移動ができるようにしたことも安心して学習ができ、そのことにより学習意欲も増加してきた。

・多様な考えを出し合う場合は、コース別学習だけではなく学習グループを機械的に分けていくことも重要であることが分かった。

・低学年では、２グループに分けることでよりきめ細やかな指導ができ、つまずきにも早く対応ができる。安心感も生まれのびのび学習している。

・コース別学習の中で、理解度が高くなるにつれて学習意欲が高まった児童も見られた。

・「算数アンケート」によれば少人数による授業に対して、６割～８割の児童が好きと答え期待する声が大きい。

◎友と共にわかる…楽しく学べる

・聴き合い活動を進めるために、自分の考えを持たせることが大切であるが、なかなか自分の考えをまとめることが難しい児童も多い。そのようなとき隣同士や小グループで考える場を取り入れることによって、考えが広がったり、自分の考えに自信を持ったりすることができる。子ども同士での学び合う場を設定することで、教える側にも教えられる側にも理解ができ効果的であった。

・本年度は、ホワイトボードを使った学習を取り入れた。自分の考えをまとめ、整理し、相手に分かりやすく説明できるだけでなく、たくさんの児童に書かせても、板書

とは違い、移動したり、同じ考えを整理しまとめたりすることもでき、とても有効であった。
・ホワイトボードを使うことで意欲的に自分の考えを発表することができた。なかには、図や絵、線分図などを取り入れながら具体的に自分の考えを説明できる児童もいる。ホワイトボード学習は発表意欲を高めるだけでなく、いろんな考えを出し合うことができ、共に学び合う場を作り上げていくことができるものであった。

◎基礎基本の定着……計算学習、学習プリント、ノート指導
・授業の開始時の計算練習や朝の会の後の計算練習の時間をとることで、計算のスピードが速くなり正確になってきている。しかし、毎回の授業開始時の練習ため授業時間に影響がでる。時間を短くしながら練習ができる工夫が必要である。
・学習プリントは、理解の定着をはるため練習問題として使用する場合と授業を進めるためのノート代わりとしても使用し、単元のねらいに合った学習を進めることができた。どちらにしても一人ひとりのプリントを点検・評価して返していく時間的ゆとりが無いのが現状である。
◎評価活動……評価規準、自己評価
・本年度は、算数科の評価規準を作成し、活用を始めた。評価の視点がはっきりしてきた。
・自己評価は、単元の終わりに行っている。単元の終わりにアンケートを採ったりして、その単元学習に対する児童の思いを知ることができた。また、単元終了後の「わかった。」と自己評価できる満足感は、次の学習意欲を高めることになる。

２．今後の課題
・コース別学習は、どのような領域や単元で行うことが有効なのか、単元のどの部分で導入するのか、各学年間の系統性や児童のつまずきなども考慮した少人数指導を進めていく必要がある。
・コース別学習の中でも、なかなか理解が難しい児童もいる。そのため、復習などを効果的に取り入れた指導計画を組んでいかなければいけない。
・自分の考えと比べたり、友だちの考えの良さなどに気づいたり、まだまだ問題意識を持っての聴き合い活動となっていない。そのためのも児童の聴く力、話す力をすべての教科を通じてさらに育てていく必要がある。
・聴き合い活動を通じて、子どもたちの学び合う場の設定の研究を進める。
・コース別学習の選択基準に友だちとの学習を考えている子、友達同士で座って学習するなどがあり、学習の妨げになることもある。そのため、コース別学習の意味を理解させることや、移動後の座席についても学習の目的に合った座席配置を考えていかなければならない。
・ノートには、日付、ページ、めあて、考え方、まとめなどを書かせたりして、学び方がわかるノート指導に取り組んでいる。その時間のまとめなどは、児童に書かせることによって学習の定着がよくわかるが、教師がまとめている段階である。児童の言葉でまとめさせていくようにしていきたい。
・授業中の様子をその場で評価することは難しく、授業後、放課後の時間に頼らざるを得ない。評価をどの場でするのか、どのようにするのかさらに研究を進めていく必要がある。
・自己評価活動では児童によって評価の基準はちがうため、どこまで理解できたか把握できない。そのため、授業者のねらいにあった自己評価内容を工夫していかなければならない。

Ⅳ．学力等把握のための学校としての取組

・実施日　　平成１５年７月実施
・実施検査名　教研式観点別到達度学力検査（国語、算数）
・実施学年　　２年～６年
・実施目的　　全国平均との比較を行い各学年の国語、算数の学習項目について定着度を分析した。来年度も同様の検査を行い指導の効果について検証していきたい。

Ⅴ．フロンティアスクールとしての研究成果の普及

・本年度は講師：古藤泰弘教授を招いて「少人数指導による基礎基本の定着」について研修を校内だけでなく町全体に広め実施した。
・算数科の授業公開を松阪地区学力推進委員会と町全体及び郡教育研究会算数部会に交流した。
・平成１６年度に授業公開を含めた研究発表会（１１月５日）を持つ予定である。

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること（複数チェック可）

【新規校・継続校】　□１５年度からの新規校　■１４年度からの継続校

【学校規模】　□６学級以下　■７～１２学級
□１３～１８学級　□１９～２４学級
□２５学級以上

【指導体制】　■少人数指導　□Ｔ．Ｔによる指導
□一部教科担任制　□その他

【研究教科】　□国語　□社会　■算数　□理科
□生活　□音楽　□図画工作　□家庭
□体育　□その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　□有　■無